様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６７２１

研究課題名（和文）20世紀前半の渡欧日本知識人達の人的ネットワーク再考

研究課題名（英文）Reconsideration on the personal network of Japanese intellectuals in Europe in the first half of the 20th century

研究代表者
杉淵　洋一（SUGIBUCHI, YOICHI）

愛知淑徳大学・教育部門・センター・講師

研究者番号：００７５８１３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の遂行によって、20世紀前半にヨーロッパにおいて活躍した、新渡戸稲造、有島生馬、小牧近江、芹沢光治良、石川三四郎、林芙美子、横光利一といった知識人達に関する国内外における資料の大まかな残存状況、及びその所蔵場所について確認することができた。その一部については、所蔵場所まで赴き、現物を調査することによって、これまでは明らかにされていなかった研究対象者のヨーロッパにおける足取りや当地の人々との交流の痕跡を発見し、研究成果として残すことができた。また、フランス、スイスにおける調査では、新渡戸稲造、石川三四郎の当地における生活の一端を知る人物達から日欧の交流史の端緒として重要な情報を得た。

研究成果の概要（英文）：　My conduct of this research became clear the condition and the place of many personal effects, being concerned with the stay in Europe in the first half of the 20th century, of Inazo Nitobe, Ikuma Arishima, Omi Komaki, Kojiro Serizawa, Ishikawa Sanshiro, Fumiko Hayashi, Riichi Yokomitsu and others. Certain their personal effects in Japan and in Europe that I have actually examined in the field survey, discovered their personal networks unedited. The result of these discoveries was included in the academic papers and the newspapers, written by myself. Because of the cooperation of local residents, I could also acquire the important information about the European life of Nitobe Inazo and Ishikawa Sanshiro in Europe, especially in France and in Switzerland.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日欧交流　日本文学　日本文化　日本知識人　ヨーロッパ体験　フランス　スイス

１．研究開始当初の背景

（１）本報告者（＝杉淵洋一）の博士論文『有島武郎の思想とその系譜』（2013 年に名古屋大学に提出）の中核をなす、作家・有島武郎（1878－1923）のヨーロッパ受容にかかわる人的ネットワークを一つの具体的な形として記録するために、有島武郎に影響を与えた人物、有島武郎から影響を受けた人物、有島武郎と交流のあった人物等のヨーロッパ体験についての調査、ならびに整理の必要性を感じていた。

（２）これまでの先行する研究では、文学、美術、政治といったように、それぞれの領域ごとに語られがちであった開国後の本邦における西洋受容史を、有島武郎の恩師であった新渡戸稲造（1862－1933）、弟子であり、のちに有島の後を追うようにして作家となる芹沢光治良（1896－1993）、生前の有島と直接の交流があった社会運動家・石川三四郎（1876－1956）やその活動について有島から篤い支援を受けていた小牧近江（1894－1978）、および、その周辺で活動していた当時の日本知識人のフランス・スイスを中心とするヨーロッパ体験や思想の受容から、総合的、かつ超領域的にとらえることによって、有島武郎、ならびにその周辺人物達の日本の近代化に担った役割を再検証する研究を立ち上げたいという思いを強く抱いていた。

２．研究の目的

（１）1900 年から 1930 年代前後までに、フランスを中心としてヨーロッパに渡った日本の知識人の当地における行動や人々との交流、そこで得た経験や人脈の日本帰国後の生活における活用、日本の社会への発信の方法についての再考証を行い、その考証の結果を公的な形で発信し、フィードバックを得ること。

（２）当時の日本の知識人は、今日とは比較にならないほど、多領域にわたって高度な知識や技能を兼ね備えていた者達が多く、有る特定の領域に閉じて、研究の対象となる人物達の交友関係を一元的に規定してしまうよりは、血縁や友情といった人間個々人の精神的な紐帯を起点として、彼等の属するグループの実態を明らかにしていくことの方が生産的であるため、これまでの制限的な視点、つまりそれぞれの研究領域の範疇に留まるきらいのあった研究対象となる人物達への恣意的な評価を一度解体し、より総合的、俯瞰的な視点から再評価を下すこと。

３．研究の方法

（１）研究１年目（2015 年度／平成 27 年度）は、これまでの報告者の研究をもとに、1900 年以降から 1930 年代前後までにフランスを中心としてヨーロッパに滞在した当時の日本知識人の遺族からの聞き取りや関連資料を所蔵する国内の図書館、歴史・文学資料館、研究所機関等での資料調査を実施するとともに、国外における調査対象人物たちに関係する資料の所蔵状況についての問い合わせの作業を中心に研究活動を行った。

（２）2 年目（2016 年度／平成 28 年度）は、1 年目で行った研究調査の結果をもとにして、資料の存在が確認されるところ、もしくは、その資料の存在する可能性が高いところに現地調査（フランス、スイス、状況によっては国内の施設）に赴き、資料調査、並びに翻訳作業を行い、その調査結果を既存の研究に照らし合わせながら、調査によって判明した当時の日欧間の人物交流について整理して、講演を行ったり、具体的な文章としてまとめたりすることに努めた。

４．研究成果

（１）有島武郎が同人の一人としてその名を連ねていた雑誌『種蒔く人』を、フランス遊学から帰国後間もない 1921 年に、郷里秋田の土崎尋常小学校時代の学友であった金子洋文（1893-1985）、今野賢三（1893-1969）とともに創刊した小牧近江の遺族に聞き取りを行うとともに、小牧近江の出生地のあきた文学資料館（秋田県秋田市）、秋田市立土崎図書館（秋田県秋田市）、帰国後の小牧が居を構えていた地である鎌倉市に所在する鎌倉文学館（神奈川県鎌倉市）において、小牧近江関連の資料についての調査を遂行した。これらの調査等からは、小牧がフランス・パリのアンリ四世校(Lycée Henri IV)で学んでいた 1911 年に、学年の成績優秀者として、盟友であったジャン・ド・サン＝プリ(Jean de Saint-Prix, 1896-1919)とともに表彰されている事実等が当時の現地の新聞『ル・タン（*Le Temps*）』紙等から明らかとなった。

　また、実際に 2016 年 9 月にフランス・パリのアンリ四世校を訪問し、当日の本報告者の訪問の様子は、「アンリ四世校を訪ねて －小牧近江とド・サン＝プリ兄弟－」として 2017 年 1 月 13 日付『秋田さきがけ新聞』の朝刊（13 面）文化欄において掲載されている。

（２）有島武郎が第一高等学校、東京帝国大学の学生達を対象の中心として主宰していた学生サロンであり、有島が憧憬を抱いていたアメリカの詩人・ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）（1819－1992）の詩集『草の葉（*Leaves of grass*）』を会名の由来とする「草の葉会」の会員であった芹沢光治良のパリでの遊学時代、それに続く南フランスとスイスでの結核の療養時代（1925-1928）の動静について、芹沢光治良の遺族への聞き取り調査、ならびに芹沢光治良生誕の地に所在する沼津市芹沢光治良記念館（静岡県沼津市）まで赴き、同館所蔵のフランス語を中心とする芹沢光治良宛ての書簡や遊学時代に

関連する遺蔵写真、書籍等について調査を行った。仏文書簡からは、芹沢がヨーロッパにおいて交流のあった人々との人間関係のこれまでは明らかになっていなかった実態の一部が明らかとなった。芹沢のフランスを代表する地理学者の一家であるルクリュ（Reclus）家、特にポール・ルクリュ（Paul Reclus, 1858-1941）とその次男・ジャック・ルクリュ(Jacques Reclus, 1894-1984)との交友関係は、石川三四郎から受け継がれた人間関係であり、芹沢の私信やエッセイ、小説などによって、その継承の過程の一端と芹沢におけるルクリュ家の人々の果たした役割の大きさが明らかとなった。

芹沢光治良に関連する本研究の研究成果については、2016 年 4 月 24 日に「「日本の魂」の伝道者・芹沢光治良」、2017 年 4 月 22 日に「石川三四郎から芹沢光治良に受け継がれた反戦・平和の思想・ルクリュ家との交流の足跡から」というタイトルの講演を、芹沢光治良の遺族が主催するサロン・マグノリア（旧・芹沢光治良邸／東京都中野区）で行い、芹沢光治良作品の愛読者を中心にして社会に対する発信を行った。

また、芹沢光治良の有島武郎に言及した資料より、本報告者による先行研究である論文「ヨーロッパ体験が開示する石川三四郎の人的ネットワーク　－ルクリュ家との交流を中心として－」（日本社会文学会機関紙『社会文学』第 33 号、2011 年）において、有島が 1907 年にロンドン郊外の亡命中のクロポトキン邸を訪れた際に、その後、石川三四郎、芹沢光治良と親交を結ぶことになるポール・ルクリュと出会っていた過去があったことを明らかにしていたが、有島が南フランスのドルドーニュ県・ドンム(Domme)村のポール・ルクリュ邸の訪問について強く興味を抱いていたことを言及する芹沢の文章を発見することができた。

（３）有島武郎が鬼籍に入った 1923 年に、国際連盟の事務局次長としてスイスのジュネーブに駐在（1921－1926）していた新渡戸稲造のヨーロッパ時代の人物関係を精査するために、財団法人新渡戸基金（岩手県盛岡市）、盛岡先人記念館（岩手県盛岡市）、花巻新渡戸記念館（岩手県花巻市）、国際連合大学ライブラリー（東京都渋谷区）等を訪れ、資料の閲覧、調査等を行った。調査を行った資料より、新渡戸と新渡戸と同時期に国際連盟の下部組織である国際知的協力委員会の委員であったフランスの哲学者・アンリ・ベルクソン(Henri Bergson)（1859－1941）との親密な交際、二人の影響関係を確認するとともに、国内における新渡戸のジュネーブ逗留時代の資料の現状についても把握することができた。

また、2016 年 9 月には、実際にジュネーブを訪れ、国際連盟時代の建物の一部が残る国際連合ジュネーブ事務局と新渡戸が在留中に住居としていたジュネーブ郊外のレマン湖畔のジョント(Genthod)村のレザマンディエ（Les Amandiers アーモンドの樹々）と呼ばれる邸宅(現在は時計の製造会社であるフランク・ミュラー（Frank Muller）社の本社兼工場となっている。)の内部（新渡戸一家が住んで居た時代と変わらぬ佇まいの玄関部分や応接室等）を見学するとともに、国際連合ジュネーブ事務局内のアーカイブ資料室に、新渡戸稲造の国際連盟勤務時代についての関連の資料が多数保管されていることを確認した。

（４）石川三四郎が、1916 年より移り住み、自給自作の農業に根付いた生活をルクリュ家の人々と送っていた、南仏・ドルドーニュ県・ドンム村のポール・ルクリュ邸、ならびに当地の郷土資料館（L’Oustal du Périgord）等を 2016 年 9 月に訪問した。（石川三四郎のフランスを中心としたヨーロッパ滞在は、1912 年から 1920 年にわたっている。このうちの半年間は、ポール・ルクリュ夫人の療養に付き添い、モロッコに住むポールの弟・アンドレ・ルクリュ（André Reclus）邸で生活している。）ドンム村に現存するポール・ルクリュ邸の内部、外観、併設する庭園を見学するとともに、現在の邸宅の所有者より、ポール・ルクリュから現在の所有者に所有権が移った過程についての話を伺うことができた。（庭では、石川三四郎が家主のポール・ルクリュ、石川と同じくドンム村のルクリュ邸で生活を営んでいた日本人・椎名其二（1887-1962）等とともに 1916 年に植えたとされる柿の木を確認することができた。）また、ドンム村における本報告者の滞在中には、石川三四郎のドンム村滞在の様子を直接に示すような資料を見つけ出すことは出来なかったが、ドンム村や近隣の町であるサルラ・ラ・カネダ（Sarlat-la-Canéda）の住民等からの聞き取りによって、石川三四郎やドンム村を訪れた日本人に関連する資料が所蔵されている可能性のある当地の施設についての情報を入手することができた。

2017 年 3 月には、石川三四郎の出身地である本庄市立図書館（埼玉県本庄市）の石川三四郎資料室を訪れ、ルクリュ家の人物達を含むフランス人を中心とするヨーロッパ人が石川に宛てて差し出した（フランス語と英語の）書簡についての調査を行った。その結果、石川とルクリュ家の人々との人間関係が、これまで以上に明瞭なものになるとともに、同図書館に所蔵されるその他の関連資料からも、石川のフランス在留時代の当地における邦人達との交遊、ならびに日本への帰国後のその交遊関係の継続とその様相について、先行研究では言及されていない側面からの発見が多数あった。

（５）芹沢光治良との接点があり、ヨーロッパでの滞在経験のある人物として林芙美子

（1903－1951）をとりあげ、パリ在留時代（1931－1932）を中心とする林の資料について、北九州市立文学館（福岡県北九州市小倉北区）、新宿区立新宿歴史博物館（東京都新宿区）等において調査を行った。（現在の東京都新宿区に居を構えていた林は、同中野区の芹沢邸をしばしば訪問していたため、北九州市立文学館と新宿区立新宿歴史博物館の二館には、林芙美子宛の芹沢光治良書簡が多数所蔵されている。）本調査からは、林がパリに逗留していた 1930 年代のフランスにおける日本人と当地の人々を結ぶコミュニティの一端を明らかにすることができた。北九州市立文学館で調査と資料の特定を行った横光利一が前年（1936 年）にベルリンで開催された第 11 回夏季オリンピックの取材のついでに滞在していたパリのセレクト・ラスパイユ・ホテル（Select Raspail Hotel）から、同ホテルの横光と同じ部屋に 1937 年に宿泊していた今日出海から東京の林に宛てて送られた葉書の存在については、2017 年 3 月刊行の横光利一文学会機関紙『横光利一研究』第 15 号において、拙稿「横光利一がいた頃のセレクト・ラスパイユ・ホテル －ホテルをめぐるフランス語資料からの検証－」として触れられている。

（６）有島武郎、有島生馬（1882－1972）におけるヨーロッパ遊学時代の当地において形成された人脈については、有島生馬記念館（長野県長野市信州新町）や京都大学付属図書館（京都府京都市上京区）所蔵の資料、日本近代文学館（東京都目黒区）の有島武郎・生馬コレクション、フランス国立図書館アーカイブ（Gallica）資料等から調査を行った。有島兄弟のヨーロッパ関係の資料の所蔵状況を確認するとともに、フランス国立図書館の資料からは、現在までに日本国内では紹介されていない有島兄弟に言及しているフランス語で書かれた当時の記事を複数発見することができた。

（７）本研究の遂行状況と成果を研究者の世界においても広く認知させることを目的として、2016 年 7 月 2 日には、「資料を編むことによって浮かび上がる人的ネットワーク －21 世紀前半の日本知識人の欧州滞在をめぐって－」というテーマで、日本社会文学会東海ブロック例会（愛知淑徳大学星が丘キャンパス・愛知県名古屋市千種区）において研究報告を行い、他の研究者達との質疑応答から、本研究の研究成果の質を上げるための貴重な助言や示唆をいただく機会を得た。2017 年 7 月 15 日にも、日本社会文学会同ブロック例会（愛知淑徳大学星が丘キャンパス・同前）において、「ルクリュ家が担った日本近代化の役割　－渡欧した日本知識人達との交流から－」というタイトルで、本研究の研究成果の一部である、石川三四郎から芹沢光治良に受け継がれたルクリュ家を中心とする二人のヨーロッパ滞在に由来する人脈とその思想について発表する機会を約束されており、その機会等を通じて、本研究の学術的な意味における認知に努める所存である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
①杉淵洋一、「横光利一がいた頃のセレクト・ラスパイユ・ホテル －ホテルをめぐるフランス語資料からの検証－」、『横光利一研究』、横光利一文学会会誌、査読なし、15 巻、2017、117－122

〔学会発表〕（計　４件）
①杉淵洋一、「ルクリュ家が担った日本近代化の役割　－渡欧した日本知識人達との交流から－」、日本社会文学会東海ブロック例会、2017 年 7 月 15 日、愛知淑徳大学星が丘キャンパス（愛知県名古屋市）

②杉淵洋一、「石川三四郎から芹沢光治良に受け継がれた反戦・平和の思想　－ルクリュ家との交流の足跡から－」、サロン・マグノリア（招待講演）、2017 年 4 月 22 日、サロン・マグノリア（旧芹沢光治良邸）（東京都中野区）

③杉淵洋一、「資料を編むことによって浮かび上がる人的ネットワーク －21 世紀前半の日本知識人の欧州滞在をめぐって－」、日本社会文学会東海ブロック例会、2016 年 7 月 2 日、愛知淑徳大学星が丘キャンパス（愛知県名古屋市）

④杉淵洋一、「日本の魂の伝道者・芹沢光治良」、サロン・マグノリア（招待講演）、2016 年 4 月 24 日、サロン・マグノリア（旧芹沢光治良邸）（東京都中野区）

６．研究組織
(1)研究代表者
杉淵 洋一（SUGIBUCHI, Yoichi）
愛知淑徳大学・教育部門・センター・講師
研究者番号：００７５８１３８